

## 福田一志氏のこと

須藤 正人

ダンディな人であった。

黒色と見まがうほどに深く濃い紺碧の海，そのまっただ中に浮かぶ五島に生をうけ，若くして考古学を志し，別府大学で一心不乱，その道を極めんと若き情熱をたぎらせた。卒業後，長崎県教育庁文化課に職を奉じ文化財調査員，文化財研究員として，大活躍の日々を送る。時あたかも，九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査に明け暮れる毎日，の感があった。

“石器の福田さん”と尊称されるほどに石器への関心が強く，石器の実測図は超一流と評されていて，ごく自然に，その分野の中心的存在になっていた。長年の石器との取り組みは，人知れぬ苦勞，努力があったはずだ。その結果獲得した学識と洞察力はするどく，迷いに迷う私たちに，いつも温和なまなざしと短い言葉による適切なご指導があった。多くの学恩をいただいた。

昭和62年3月刊行の『長崎県遺跡地図』の作製の折りは，壱岐島の南半分の地域を担当し，くまなく踏査された。壱岐をはじめ県内の埋蔵文化財の基本史料としての価値は，今もなお燦然と光り輝いている。

その後，県立高等学校の教壇に立つ機会をえて，長崎工業高校，上対馬高校に教鞭を執り，数々の教え子とあいまみえた。発掘調査現場で裏うちされた若き教師の歴史の授業は実に堅牢で明快，人気を博し，信奉者さえ出た。学校教育現場の教師というものは，その授業から尊敬と信頼をえて，はじめて存在する。若き教諭の存在感は日に日に大きなものとなり，学校にも生徒たちにもなくてはならない人物として大きく成長していく。

この間，5年。教壇に立ち生徒に接する教職の醍醐味を知ったころ，長崎県学芸文化課の主任文化財保護主事として，再び埋蔵文化財の調査，保存の第一線に戻って行った。

平成14年4月，尊敬する人が身近な人となった。壱岐島の原の辻遺跡調査事務所に主任文化財保護主事として赴任されたのである。その頃，壱岐は，原の辻遺跡の話題で沸きに沸いていた。平成9年，待ちにまった国の史跡となり，平成12年には国の特別史跡に昇格する。平成14年1月，壱岐郡の全4町長が県立埋蔵文化財センターの壱岐島設置を県知事に陳情し，壱岐の眠れる古代遺跡に陽をあてて，壱岐全島の活性化を企てる一大プロジェクトがスタートしようとしていた。

壱岐の前途を左右する大きな課題の解決と実行に向けての活動の場が待ち受けていた。時として寢食を忘れての勤務を経験し，県立埋蔵文化財センターと壱岐市立一支国博物館の整備基本計画を策定し，安堵の胸をなでおろしたのも束の間，平成17年，県下の文化財行政の大本山・学芸文化課へ転出，県下全市町村の文化財保護行政の先頭に立ち，あらゆる業務に，献身的に精力的に取り組んでいた。

平成21年10月18日，52歳の天寿をまっとうされた。いつも気にしておられた壱岐の大きな企ては，ついに目にされずに突然旅立たれた。一支国博物館の館長室に，壱岐のことを気にかけて下さっていた人々の鬼籍簿がある。藤田和裕氏（平成12年・53歳・考古学）について書き込んだ。今年の8月には，石丸太郎氏（92歳・考古学）の名を加えた。天国で仲良くそろって出迎えた兩人に，大先輩は「君たちは若すぎたな」と話しかけられたはずだ。本当に若すぎた。今からの考古学人生であった，と残念でならない。

御両親，奥さま，ご子息，お嬢さまにとって，自慢の子供であり，夫であり，父であった人の両眼

は、いつも精気に満ちあふれ、少年の瞳のようにキラキラと輝いていて、学問をする人の不可欠の要件ともいえるべき、天賦の感のするどさ、が見てとれる“学者の眼”でありました。

訃に接し、息が止まるほどに、おどろいた。

長いつきあいであった。考古学への取り組みをはじめ、行政官としての毅然とした態度や指導力は常に洗練されていて、真似のできないスマートさがあった。

小気味好いほどに、ダンディな人であった。